



発行日 2005年8月15日 発行人 福島伸悦
 編集責任者 浅井宣亮 編集担当 菅原研洲 編集委員 亀野 太田 大谷
 発行所 SOTO禅インターナショナル事務局 〒233-0012 神奈川県横浜市港南区上永谷5-1-3
 Tel. 045-843-8852 Fax. 045-843-8864 URL: <http://www.soto-zen.net/>
 郵便振替 00100-6-611195 SOTO禅インターナショナル

Vol.29



CONTENTS

●巻頭	「現代社会における道元禅」…………… 大本山永平寺監院 森 嶺雄	1
●特集1	両大本山ワークショップ講演会 「わたしはアメリカで坐禅をどう語ったか」(1) …… 米国 パイオニアヴァレー禅堂 前堂頭 藤田 一照	2
●特集2	2005年度 総会講演会抄録 「情報化社会における宗教意識のハイパー化」(後編)…………… 國學院大學教授 井上 順孝	6
●海外レポート	ハワイ発「カラウババ半島訪問記」(2)…………… S Z I事務局 太田 賢孝	8
●連載	「東漸?西漸?—ヨーロッパの禅—」(2)…………… 山形県 乗慶寺住職 五十嵐卓三	10
●国内レポート	「愛知万博「世界青年宗教者平和会議」について」…………… S Z I副会長 浅井 宣亮	12
●国内レポート	「熊本聖護寺 国際安居報告」…………… S Z I事務局 大谷 有為	14
●S Z I通信	「元ペルー大統領 アルベルト・フジモリ氏と会見」…………… S Z I会長 福島 伸悦	15
●S Z I通信	動静報告・ウェブサイト・ブログサイトの広報・寄付者・会費納入者 「采川南米総監壮行会・三好前総監慰労会報告」…………… S Z I事務局長 亀野 哲也	16

巻 頭

現代社会における道元禅

大本山永平寺 監院 森 嶺 雄



大本山永平寺を訪れる外国人は年間1万人を越え、また、宿泊して僧堂修行の一端に触れる、いわゆる参禅者や参籠者はおおよそ300人に上り、年々増加している。日本のある企業が、来日した取引先の外国人賓客のために京都での接待を予定していたところ、当地人のたつての希望で目的地を福井の永平寺に変更したなどという話も聞く。

宗門の教えと実践に学ぼうとする人々が世界各国におられることは仄聞、管見ながら承知していたが、こうしてわざわざ本山に来られる多くの外国人を目の当たりにすると、出家在家、老若男女を問わず一様に高祖様の真摯な求道心に導かれ、深い敬慕の念を抱いて来られていることを強く感じる。これは取りも直さず、今日まで国際布教の現場で心血を注がれた布教師各位の御労苦が、単に宗門の広がりとい

う側面ばかりでなく、信仰の深さの面でも正しく結実してきていることの現れであろう。

永平寺に外国人受け入れのための「国際部」が常設されて20年になろうとしている。そこで外国人参籠者、参禅者と直接触れ合うご縁を得た修行僧はこの感懐を等しくしていることであろうし、願わくは、ひとりでも多くの修行僧に、我々を取り巻くこうした世界の状況を見聞して欲しいものである。

この度、S Z Iの企画による特別講義を本山において開催することが出来た。海外の布教現場でどんな努力や工夫がなされてきたかを具にお教え頂き、まことに得難い機会を与えて頂いたと感謝申し上げます。宗教観を含め、価値観がかくも混乱している現代に今後様々な対応を迫られる若き修行者に、またとない糧となるに違いない。貴会がこうした有意義な活動を通し、ますます発展されんことを心より願うものである。

特集1 / 両大本山ワークショップ講演会

わたしはアメリカで坐禅をどう語ったか（1）

米国 パイオニアヴァレー禅堂 前堂頭 藤田 一 照

はじめまして。藤田一照と申します。この3月に約18年にわたるアメリカでの活動に終止符を打ち日本に帰ってきました。SZIから「お前の滞米経験に基づいて雲水さんたちのためになるような話をせよ」というご依頼をいただきましたので、僭越ながらこういう題でお話させていただくことにしました。と言いますのはわたしがやっていたことは、自分が住持をしていたヴァレー禅堂や招かれた他の瞑想センター、大学、高校などいろいろな場でいろいろな人たちを相手に一人で「参禅係」を勤めてきたということに尽きるからです。

もっとも、始めからそういうことをしようと思ってアメリカに行ったわけでは毛頭ありません。何も知らないでそこに行ったらいやおうなくそういう配役を勤めなければいけない羽目に陥り、あわてふためいてあれやこれやと試行錯誤を繰り返してきたというのが実情なのです。有能な参禅係だったとは到底言えませんが、わたしの経験の一端をお話してなにかの参考にしていただければと思います。

わたしは、心理学専攻の大学院生だった二十代後半にふとした機縁から坐禅に出会いました。今から振り返ると自分でも不思議なくらい坐禅という実践に強く惹かれ、結局学業を放棄して修行生活に飛び込みました。その時点でそれまでもっていた将来の人生プランをみんな白紙にもどし、坐禅が自分を引っ張っていくところに素直に従って行こう、縁に任せていこうと決めました。日本で六年余り修行をしてアメリカに渡ったのも自分から言い出したことではなく師匠からの「行ってみないか」という誘いにひょいと「乗った」というのが実際のところなのです。むろんアメリカに行って人様に何か教える



総持寺でのワークショップ



開講式・国際布教示寂者追悼法要

などということはまったく考えていませんでしたし、まだ修行の浅い身でそんな力量があるはずありません。それに師匠からも「向こうで何かを教えなくてはなどと余計な心配はしなくていい。達磨の面壁九年を手本にしてただ黙って坐禅をしておればいい」と言われましたので、私としてはただ「修行の場を移す」というくらいの気持ちでした。それと、自分がこれまで日本でやってきたことが文化の異なる地で果たして意味を持つのか、どのくらい通用するのか、それを実地にテストしてみたいという思いもありました。

当時のわたしは何故か自分を引きつけてやまない坐禅をとにかくまずしっかり身につけきちんと理解したいとただそれだけを念願としておりましたので、坐禅について他人に説明したり指導するといったことにはまったく関心が向いていませんでした。またその機会もありませんでした。それに「言葉では語れないこと、思いでは思えないことをするのが坐禅である」、「まず十年、黙って坐れ」といった先達の教えに深くうなずくところがありましたので、坐禅についてあれこれ語ること、「言葉を弄する」ことにはどこか抵抗感をもっていたことも確かです。

しかし、1987年にアメリカに渡り、わたしの先輩たちが建てたヴァレー禅堂という坐禅堂に常住僧として住み始めるやいなや、いやおうなく坐禅についてあれこれと語らなくてはならなくなりました。第一の事情はわたしが置かれたポジションです。それまでは師や先輩に引っ張られて進んでいた、いわば「客車」のような位置にいたわたしが今度はみんなを引っ張る「機関車」になることを期待されていたのです。そうするとみんなの実物見



總持寺では一般の方も聴講されました

本としてしっかり坐禅することはもちろんですが、それだけではなく言葉を駆使して教え導くということも当然必要になってきます。「世人の愛処（世俗の人の愛好するところ）」（『行持』巻）ではない坐蒲の上までどうやって人を誘引するか、坐禅を修行する途上ではさまざまな困難や疑問をに出合いますが、それぞれの人がそれを解決するにあたって具体的にどう手助けするべきなのか、そういった「坐禅のコーチング法」を編み出さなければならなくなったのです。

第二の事情は住んでいた場所の特性です。わたしがいたアメリカ東部は西海岸と並んで仏教に対して非常に関心が高いところで、アジアにおいてはそれぞれの地域で「住み分け状態」のまま発達してきた仏教の諸伝統が大小さまざまなセンター・グループを形成し並存して活発な活動を展開していました。こういうところでは「自分の旗色を鮮明にする」努力が特に必要です。さもなければ坐禅が容易に他の瞑想実践と混同・混合されたり、歪曲して理解されたりするでしょう。坐禅がZEN MEDITATIONと英訳されていることから、それは坐って頭でなにかについて黙考することだろうというような先入観を持っていたり、あるいは精神統一とか無念無想になること、神秘的な体験をすることだと単純に思いこんでいたりする初心者や、公案禅系の坐禅、南方仏教系のヴィパッサナ、チベット仏教系の瞑想などをすでに長年やってきていてその枠内で坐禅を理解しようとしている人たちが相手なのですから。また、同じく「只管打坐」を修行してきていると自称する人々の間でもその理解には相当の違いがあるという現実にもぶつかりました。こうして、道元禅師の説いた坐禅とはいったいどのようなものなのか、他の瞑想といったいどこが違うのか、また同じなのか、それを優劣の問題としてではなく、できる限りはっきりと表現していかなければと思わざるを得なくなったのです。わたし自身のためにも自分がやっていることを他の伝統との比較においてははっきりと自覚しなおすことが必要になったことはいうまでもありません。

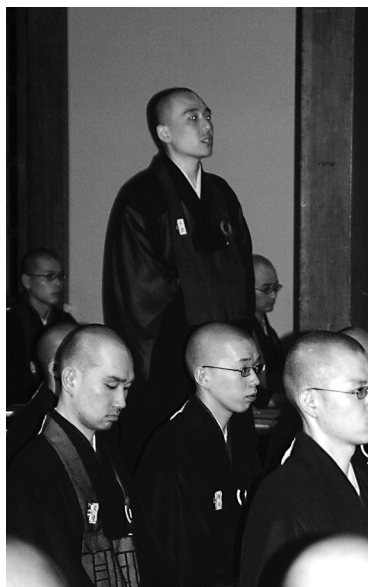
坐禅はどこまでも言葉や思いでは決して置き換えられないこと、身心を挙げて行いとして現にやるより他はないことなのですが、かといって言葉や思いを軽視・無視すれば実際には言葉や思いを超えたことを正確にそして深く実践し伝えていくことはできないのだと思うようになりました。それは、いわば坐禅という具体的な行を「本文」とするならば、その本文を正確にそして深く読み込むために有効な「脚注」、しかも自分が目の前で相手としている人々にとって本当に意味のあるような新しい脚注をこれまでに出版された古い脚注に学びながら自分なりに作っていかなければならないということです。

さて、こうして坐禅を語る、言葉で表現していくという課題に取り組むようになったわけです。わたしの場合は自分の母国語ではない英語で語らなければならないという語学上の大きな問題がありましたが、それとは別に内容面からいえば大きく言って二つの問題がありました。一つは坐禅に向かうときの態度如何の問題、もう一つは実際に坐禅をするときに起きてくる技術的な問題です。言い換えれば前者は「坐蒲に坐る以前」の問題であり坐禅の本質理解の問題、後者は「坐蒲の上」での問題でありどちらかといえば坐禅の実践上の問題です。『普勧坐禅儀』の構成でいえば前者は「たずぬるにそれ道本円通…急に恁麼の事を務めよ」の部分に関わることであり、後者は「それ参禅は…籬籠いまだ到らず」の部分に関わることです。実際には両者は切り離しがたく結びついた同一の問題の両面なのですが話しの便宜上とりあえず二つに分けてお話ししたいと思います。

まず前者の問題から。「現成公案」の巻に「人はじめて法をもとむるときはるかに法の辺際を離却せり」とありますが、わたしたちが坐禅に取り組もうとするときたいていの場合はまったく見当違いの方向を向いているものです。そして人間としての業の続きの上で坐禅をしようとしします。わたしが道元禅師の書かれたものを読んで一番驚かされたのは坐禅が普通の人間的営みではなく常識的な考えからは決して出てこないような「途方もないしろもの」だったということでした。「凡夫の向上」のた



永平寺でのワークショップ



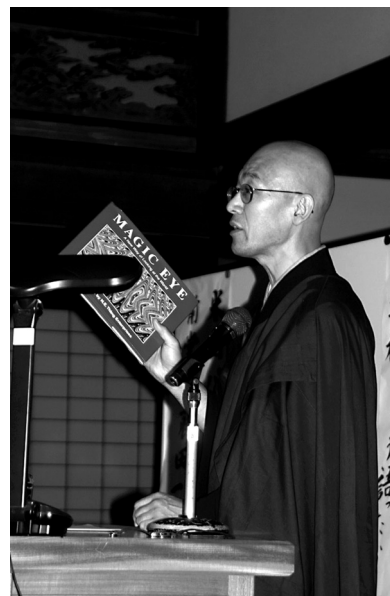
永平寺大衆の方から質問

めに編み出された世にいろいろあるトレーニング法のうちの一つというような人間的見地に立って坐禅を見ている限りはとうてい理解できるものではありません。坐禅はむしろそういう人間のさまざまな「もがき」がすたれたところ、個人的欲望に基づいた損得勘定が尽きたところに成立しているものだったのです。実際に坐禅をする以前に少なくともこのあたりの事情がよく飲み込めて

いなくてはいくら努力しても、がんばっても坐禅には命中しません。その努力は残念ながら坐禅の努力とは別なことだからです。坐禅の世界は坐禅して自分をどうにかしよう、その成果を見届け満足したいという態度の手前には決して開かれてこないのです。

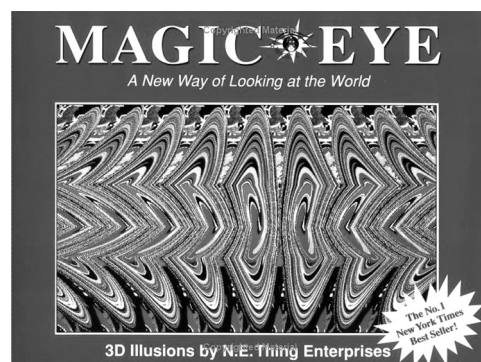
アメリカ人で坐禅をやろうと志すような人たちはだいたい非常にまじめで勤勉な人たちです。教育水準も高く、自分の立てた目標を目指し一生懸命努力をしてそれを達成するというやり方ですと生きてきた人たちです。わたしが禅堂に住み始めてまもなくのころある参禅者から「俺のために悟りのカリキュラムを作ってください。どんなに難しくてもやり遂げるからお願いします」とまじめな顔で言われたことがありました。そのときわたしが言えたのは「わたしが思うに悟りというのはそういうやりかたではあなたに訪れないのではないのでしょうか。だからもうしわけないけど作れません」ということくらいでした。がむしゃらな熱意だけで見当違いな方向に突っ走るのは修行でも精進でもありません。八正道のそれぞれにかならず「正」という形容詞がついていることを忘れてはならないのです。仏道においてはねらいが正しい方向を向いていなければなにをやっても修行とはいえません。坐禅とはただ坐ることだといってもどちらを向いて坐っているか、どういう態度で坐っているかが肝心なのです。「自己をはこびて」という自己の意思・意欲を主とする態度から「万法すすみて」という非思量の態度へのラディカルな切り替え・入れ替えがきわめて大事だということをよくよく承知しておかなければいけないのです。わたしが最も苦勞し、また最も興味深く取り組んだのは坐禅の独自性（宗門の用語でいえば「只管」「修証一等」「不染汚」「無所得無所悟」といったことがら）に関わるこの一点をどう語り、どう納得してもらおうかということでした。それは日常的な身心の使い方を一時的にせよ放棄・停止・保留してそれを坐禅のなかに持ち込まないという、

通常の努力とは質的に異なる努力を持続することです。このような努力の質、態度のラディカルな切り替えはいわゆる「まじめな頑張り屋」であればあるほど理解も実行もかえって困難であるようです。自分が得意であり誇りにも思っている「頑張り」、「努力」がかえって邪魔になるということがなかなか得心できないしそれを捨てきれないからです。



マジックアイを例に説明をする
藤田先生

ここに「マジックアイ」と題された絵本のようなものを持参しました。この画の中にはある三次元の絵が隠されているのですが、普通の見方ではいくら一生懸命に探してもご覧のようにコンピュータで作られ二次元の繰り返しパターンの図柄しか見えません。しかし眼の筋肉を緊張させて対象に焦点をあわせて見つめるような目つきで何かを探し出そうとする普通の見方を放棄して、眼の筋肉をリラックスさせ探し出そうとする努力をあきらめ「マジックアイ」といわれる焦点をぼかしたようなまなざしでじっと待っていると、隠れていた絵があるとき思いがけない仕方で向こうからフッと立ち上がってくるのです。「おっ、やったぞ!」と思ってもっとよく見ようと元の見方に戻ったとたんその絵は消えてしまいます。こちらの見る態度・姿勢と見えてくるものとは一対のものなのです。そこにはきわめて厳密なルールがありごまかしは効きません。



Magic Eye I: A New Way of Looking at the World
N E Thing Enterprises (著), Enterprises N. E. Thing (著)

ここ数年、わたしは坐禅に向かうときの態度が大切であることを説明するときこの絵本を例に使ってきました。(続く)

2005年度 両大本山ワークショップアンケート結果

【はじめに】

今年度、両大本山でワークショップを開催するにあたって、事務局では参加者全員にアンケートを行いました。そこで、アンケートを提出していただいた方の分をまとめてみたところ、アンケート結果の一部から現在両大本山に安居する方の心・思いを垣間見ることができましたので、その所見をこの紙面を借りて報告したいと思います。なお、今回のアンケートの項目は以下の通りです。

【両大本山ワークショップアンケート】

■設問1：今日のワークショップを何で知りましたか？
(複数回答可)

- | | |
|----------------|---------|
| 1 S Z I の会報を見た | 2 人に聞いた |
| 3 知らずに会場に来た | 4 その他 |

■設問2：今日のワークショップは、

- | | |
|-------------|----------|
| 1 大変興味深かった | 2 興味が沸いた |
| 3 興味が沸かなかった | 4 関心がない |

■設問3：国際布教は、あなたにとって…

- | |
|------------------------|
| 1 是非、国際布教師として海外に赴任したい。 |
| 2 機会があれば、国際布教の現場に触れたい。 |
| 3 海外赴任は出来ないが、活動に興味はある。 |
| 4 全く興味が沸かない。 |

■設問4：今日のワークショップの感想（自由記述）

■設問5：講師の先生へ一言（自由記述）

■設問6：SOTO禅 インターナショナルは、国際布教支援・人材育成・国際交流などを活動の柱としております。今後のS Z I ワークショップに参加する際、どのような内容・形式を期待しますか。（自由記述）

【アンケート結果】

まずは、選択肢がある3つの設問について報告いたします。

《大本山永平寺：回答者128人》

設問1	1	29人	22.7 %
	2	16人	12.5 %
	3	40人	31.3 %
	4	43人	33.6 %
	計	128人	100.0 %

設問2	1	23人	18.0 %
	2	86人	67.2 %
	3	12人	9.4 %
	4	5人	3.9 %
	計	126人	98.4 %

設問3	1	2人	1.6 %
	2	50人	39.1 %
	3	59人	46.1 %
	4	14人	10.9 %
	計	125人	97.7 %

《大本山總持寺：回答者45人》

設問1	1	1人	2.2 %
	2	6人	13.3 %

設問2	3	21人	46.6 %
	4	10人	22.2 %
	計	38人	84.4 %

設問2	1	3人	6.6 %
	2	26人	57.7 %
	3	12人	26.6 %
	4	2人	4.4 %
	計	43人	95.5 %

設問3	1	1人	2.2 %
	2	19人	42.2 %
	3	16人	35.5 %
	4	8人	17.7 %
	計	45人	100.0 %

【結果について】

結果を見ていただければ分かりますが、両大本山を比べてみて、それほど大きな違いはありません。そこで、特に今後のSZIの活動に関わる設問として、問3では「2 機会があれば、国際布教の現場に触れたい。」

海外赴任は出来ないが、活動に興味はある。」等が多く選択されたことで、両大本山に安居されている方の意志として、今後こういった海外布教に参加することも自らが取り得る一つの選択肢としてあることが如実に表れています。しかし、これまでの国際布教師さんがどのようにして海外に渡ったかを考えますと、なかなか容易ではないことも事実であります。その質問に関連して、SZIワークショップへの要望から、今後のSZIにどのような活動を期待しているかを挙げて参考に使いたいと思います。

まず、両大本山ともに多く寄せられたのが、「外国人の方の話を直接聞いてみたい」という意見で、海外の人から日本人や宗門や坐禅がどのように思われているかを聞いてみたいとのこと。これに近い意見として、より比較文化論的な観点からの話や、海外での僧堂生活についての具体的な情報を知りたいという意見がありました。他に多く見られた要望は、「講義形式ではなくディスカッション形式にして欲しい」という意見で、ここには限られた時間において自分の知りたいことを知りたいという思いがあるようです。それから、SZIが持つネットワークに期待する意見も多く、「どうすれば海外寺院に入ることが出来るのか」という意見や、「実際に自分の寺で海外の人相手の坐禅会を行うときに、どのようにすれば良いか」などの情報を開示して欲しいという要望も多く寄せられ、あるいは「SZIが人材育成のプログラムを実施するならば、それに参加してみたい」という積極的なご意見もいただきました。

これらの要望からは、ただワークショップへの要望ということを超えて、広くSZIの活動に期待する意見が見られました。少しでも多く応えられるよう、今後ますます努力をしていくことを明記しておきます。それから、当日寄せられた感想については、極力全ての意見を紹介できるよう別途編集作業を進めておりますので、そちらをご覧くださいませようお願い申し上げます。

(SZI事務局)

情報化社会における宗教意識のハイパー化（後編）

國學院大學教授 井上 順 孝

2. 情報化が宗教の「ボーダレス化」に与えた影響

情報化によって、宗教では色んなレベルでボーダレス化が起っています。これは垣根が事実上意味を持たなくなる、ということなんですけれども、これは実際の教団がそうだということではないんです。教団はむしろ情報の壁を作ろうとしています、情報の流れで見るとボーダーはなくなっているということです。そして、情報化によるもう一つの問題はユーザーの側にとってA教団とB教団という差があまり意味を持たないことです。みなさんは伝統宗教と新宗教は違うと思っているかもしれませんが、受け手の側からすると余りよく分からないということです。これは、仏教だけじゃありません。学生に「キリスト教って何？」って聞いたら「会ったことあります。あの聖書読みませんか？と言ってくる人」という答えがよくあります。これはエホバの証人です。エホバの証人は非常によく布教していますので、キリスト教を学んだことがない学生はキリスト教の代表例と受け取ったりする。こうした学生は決して少数派ではありません。国外なんかでも、そういう現象起っていると思うんです。外国・ヨーロッパなんかで一番良く会う仏教者がダライ・ラマだったりとかするわけです。別に何宗だとか、その宗派だとはなくて、その時注目を集めたものにパッと飛びつくという構造になっているようです。そうしたなかで宗派側が伝統的な権威を主張してもほとんど意味がなくなっている。

情報の壁は、つまり教団の「中核部と一般信者」とか「信者と非信者」とかいった間にある壁はドンドン崩されていきます。さらに、厄介なのは、宗教の境界がいまいになる。たとえば、今までカウンセラーは宗教ではないと言われていたのですが、スピリチュアルカウンセラーと自称する人が増えました。そういう人の本がベストセラーになったりする。あるいは、ネット上では本物になりますし、例えば「〇〇教」というHPがあるとすると、それらしき宗教法人らしきモノがあります。「〇〇教」と名乗るのは自由ですからね。これは、皆さんご承知の通り、宗教法人になるには登記がなければなりませんけれども、宗教法人でなくても宗教的活動は誰でも自由です。「結社の自由」「信教の自由」がありますから、たとえば「達磨教教祖」などと称して、看板を掲げるのは誰でも今日から出来るわけです。しかし、いきなり建物に看板を掲げるのは、周りが「何だアレは？」ということになりますが、ネット上であればそれらしいモノを作るのは実に簡単なことなのです。市中に出回っているソフトウェアを使えばすぐに可能な時代ですから、宗教のマネをするくらい容易いことです。逆に「宗教ではあり

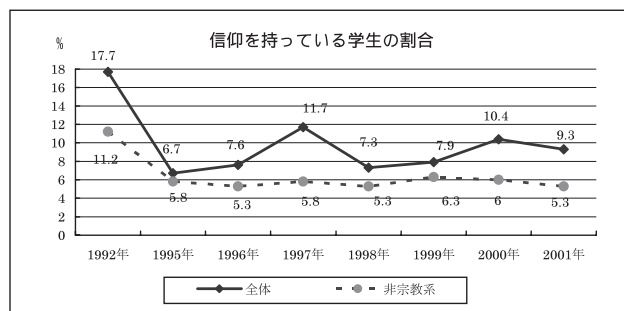
ません」とか言いながら、カウンセリングのようなことをやるのも良いということになります。こういう風に情報化は、宗教の色々な境界線を曖昧にしているわけです。

3. 若い世代の宗教意識の変容からうかがえる将来

ここでパワーポイントを使いながら若い世代の話に入っていきたいと思います。今までの話は、抽象的な話としてお聞きになったかもしれませんが、我々がやった調査の結果を中心にお話したいと思います。

これは、ここにあるように、プロジェクトでやった調査です。1992年、そして1995年から2001年まで連続しておこないました。2002年からちょっと休んでいましたが、今年2005年またやりますので、どういう結果になるか、秋にはおおよそ傾向が分かると思います。これまでの調査では、いろんな質問したのですが、今日の話に関係あることを幾つか取り上げます（編注：当日は多くのご指摘を頂きましたが紙幅の関係でここでは一部抜粋して収録）。

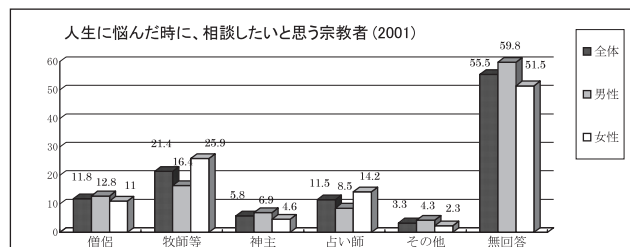
（1）まず、信仰を持っている学生の割合というのは、【図1】のように変化しているんです。上の線は、宗教系の学校も含むのでバラバラなんです、下の線は非宗教系の学校で、だいたい6%前後です。ここで大きく変化しているのはオウム真理教の事件の影響です。色んな調査しても分かるんですが、1995年は現代宗教を考える上で大きな節目の年です。



【図1】

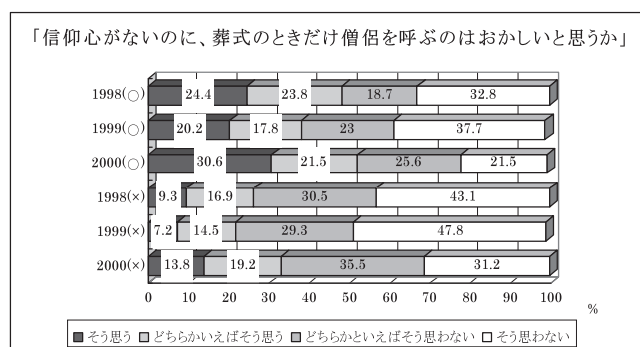
（2）「人生に悩んだときに相談したい宗教家」という質問ですが、これは複数回答が可能ですので100を超えるのですが、【図2】の通り、一番高いのが牧師・神父・シスターです。約2割。その次が、占い師をわずかに上回って僧侶ということで、11.5%と11.8%とわずかな差ですが、神主になると5.8%なんです。國學院の先生方が聞くとガッカリするかもしれませんが、ただ、これ神主というのは接触する機会が一番少ないんですね。

もともと相談する相手だとは考えられていないわけです。初詣とか七五三はありますけど。あとはお祓い。一方、お坊さんだと棚経だとか Person to Person で接する機会が、神主に比べるとかなりあるので、それを考慮して考えなくてはいいけない。また女性に限るなら、わずかの差ですが、僧侶よりも占い師に相談したいと思っているということになる。



【図 2】

(3) 次は仏教にとって非常に重要な質問ですが。「信仰を持っていないのに、葬儀に僧侶を呼ぶのはおかしいと思いますか?」という質問です。【図 3】ですが、信仰を持っている人と持たない人で、かなり数字に違いがあります。やはり信仰を持っていると「ちょっとおかしい」で、持っていないと「別に良いんじゃないの」っていうことになります。仏教が自分の信仰じゃないけれども、僧侶を呼ぶのは変なことではないとなっているわけです。逆にいいますと、信仰は持っていないけど僧侶を呼んでいるということにもなります。



【図 3】

4. ハイパー化した感覚がとらえる宗教

さて、「ハイパー時代」というのは、宗教ユーザーが中心になる時代という風に私は考えています。宗教メーカーとは、教団とか宗教を広める側です。何を伝えるか、あるいはどれが中心的な教えか、教団を持続させるにはどうしたら良いか? こういう発想をもっている側です。そして歴史的な宗教というのは、主に宗教メーカー的な発想から論じられてきました。悟りを開くにはどうすれば良いか? それを伝えるには誰がどうすれば良いのか? 人々を教化するにはどれをどうしたら良いのか? ということです。どれが本当の宗教か? など、伝える側からすればとても大事で、これが無くなったら宗教ではなくなるわけです。ところが、今はそうではなくて、1人1



人が自分にとって、いわゆる合うものを選ぶ時代。これはかつて宗教の消費者的選択とか言われました。マーケットで色んなものを選んで買うように、宗教も選ばれる時代だということが、60年代に言われたのですが、今はひょっとしたらそういったパッケージですらないかもしれません。「〇〇教」ではなくて、「〇〇さん」であったり、その人が書いた本の特定の箇所であったりですね。ある人がやっている特定の行事であったりするのを取捨選択して、1人1人が独自のパッケージを作っていく。これが良いか悪いかはさておき、自然とそうした人が増えるだろうという話です。

「ポスト檀家制度」では、お檀家さんが変わっていく。檀家であるという意識がどうなっていくかですね。その一方では、宗教的なものを求めている人もいます。ところが、その求めている人が宗教家へ向かうような回路になっていないんです。ですから、檀家さんがいれば、これまでのやり方でかなりカバーできるかもしれませんが、檀家制度の構成員は意識の上でのハイパー化が進行していく。そうした人達の意識の中に、当然伝統仏教はあるんです。でも、そういう人達に、伝統仏教宗派がどういうところで接点があるかということです。どこで接点を作ろうとしているのかということを一方では考えないと、やっぱりどんどん希薄な存在になっていく、元オウム信者であった高橋君が言ったように「風景化」することになります。

最後、暗い話にもなりましたが、物事も始めるときには楽観的に考えた方が良いでしょう。しかし続けて行くには非常に厳しい状況も見えて対応できるようにすることも必要です。今回、私は、大学という場においても、宗教の抱える問題と同じようなことが起こっていると思って、こうした話をしました。大学と宗教ではもちろん目的は違いますが、そこでは人々はなにがしかの目的を持って行動しているということ、そこにおける価値観や行動原理に大きな差が見られるようになっていくこと、そして、この状況にどう対処するかということには、結構共通項がありますので、この厳しい状況というものを正面から捉えて今後を考える材料にしたいということでした。(完・質疑応答は略記)

… 海外レポート ハワイ発 …

モロカイ島カラウパパ半島訪問記（2）

S Z I 事務局員 太田 賢 孝

ここは、アメリカ合衆国ハワイ州のモロカイ島カラウパパ半島。19～20世紀、ハンセン病の強制隔離政策のもとで強制的に連行されてきた多くの患者が、海と絶壁によって隔離されたこの半島で生涯を過ごしていました。

この記事は、平成16年9月6日、オアフ島からの日帰り訪問をした際の訪問記（第2回）です。

■ ジェントルな先生とエキサイティングな子供達

けたたましいエンジン音と共に、一台のスクールバスがやって来ました。そのバスは、音の割には人がジョギングするほどのユックリとしたスピードで近づき、飛行場の傍に停まりました。車内には白髪の運転手さんが一人だけ。彼は運転席で何かゴソゴソと取り出して、ゆっくりとバスを降りてきました。運転手兼ガイド役のリチャード・マークス氏でした。リチャード氏はアラスカから飛んできたという渡り鳥たちに餌を与えながら、初対面の私たちと挨拶を交わし、しばし談笑して過ごしました。

この日、半島を訪問する外部の者は、私たちの他に、ラバで約1時間を掛けて断崖絶壁を降りて来るツアー客20名程度。私たちはそのツアー客を絶壁の直下まで迎えに行き、共に昼過ぎまで半島内観光をするのだと教えてもらいました。（現地情報が入らず、当日この話を聞くまで、自分たちがどのような行動をとるのか、わかりませんでした。）

バスは、半島内にある無数の墓地や居住区内を通り抜け、ツアー客が待っている断崖の直下まで行きました。

暖かな太陽の光を浴びてすくすくと育ったヤシの木、絶え間なく聞こえる波の音、どこまでも青く広がるハワイの海。まさに「南の国の楽園」です。けれども、飛行場から遠目に見た絶壁を間際に見ると、気分は一気に

沈みます。

それにしても20人ほどのツアー客が加わって、バスの雰囲気はガラリと一変しました。誰もが、人跡未踏の地に足を踏み入れたかのような興奮を抑えられない様子。なのに、迎えに来たスクールバスには日本人の私たち…。不思議そうな表情をして「君たちは一体、何処から来たんだ？」と訊ねられもしました。飛行機で来たのですから「空から来たんだよ。」と正直に答えたところ、彼らは飛行機のアクセスを知らないのか「えっ？君たち、なかなか面白いこと言うネ！」ほどの理解しか得られませんでした。

リチャード氏の「子供達は全員揃ったかい？」の声と共に、スクールバスは発車しました。そして、今でも多くの居住者が生活しているカラウパパ居住区に入り、幾つかのポイントを見学しました。

■ ハワイの英雄、ダミアン神父

まずバスが停まったのは、居住者らによって建てられた「ダミアン記念碑」でした。リチャード氏も子供達もバスを降り、記念碑の前に行くと、リチャード氏は記念碑前の長椅子に腰掛け、この半島とダミアン神父の事を語り始めたのです。

これは、ベルギー出身のカトリック神父ダミアンを顕彰する碑石です。彼はハワイ各島に赴任し、その最後に、モロカイ島カラウパパ半島にたどり着きました。当初はここでの赴任は3ヶ月間の予定でしたが、後任者が決まらなかった事と、彼自身ここですべき事を見つけたという意志により、16年間に渡ってハンセン病患者らに献身的看護と精神的安らぎを与え続けたのです。生きる希望



絶壁間近のツアー客



ダミアン記念碑



絶壁間際の教会と草原

を失い、苦悩の淵に深く沈んだままの患者たちに対して、彼は常に「私たちハンセン病患者は…」という言葉で語りかけていたのです。最終的には彼自身もハンセン病に罹りましたが、彼は患者と全く同じ立場に立てたことをむしろ喜びとして受け止めたのです。そして49歳で亡くなるまで、ますます患者たちの為に毎日を過ごしました。

今日、ハワイ州議会庁舎の前には、唯一、彼の銅像が建てられています。彼こそ、ハワイを代表する真の英雄だからです。

リチャード氏の朴訥とした語り口調は、彼らが味わってきた苦しみや悲しみを感じさせるには、十分でした。

■ 物言わぬ草原

再びバスに乗り、カラウパパ居住区内を巡りました。かつてのハンセン病療養施設跡・合衆国政府から派遣されている役人の官舎（赴任中の役人は、魚釣りが大好きだそうです）・自治消防施設・居住者の為の教会等を見て回り、訳あって後で再び見ることになる、小さなブックストアで買い物もしました。このブックストアの前には、何故か石灯籠が。後にその訳も教えてもらいました。

カラウパパ居住区から外れ、半島東端のカラワオ旧居住区に向かいました。このカラワオ旧居住区こそ、強制隔離政策時代にハンセン病患者らが住んでいた地域です。今日では当時の住居は全て朽ち果ててしまっており、この区域に入っても、バスが進む道の両側は全くの密林状態。説明がなければ、人が住んでいた所だとは全くわかりません。海風を避けるために患者たちが溶岩を積み重ねて作った石垣だけが、往事の面影を残しています。

しばらく道を進んでいくと不意に密林が途切れ、見通しの良い草原が広がっていました。そして草原の傍らには、カラウパパを語るシンボリックな教会。この教会こそ、ダミアン神父がカラウパパ半島での最初期に過ごした「聖フィロメナ教会」です。ダミアン神父がこの教会で行った業績は主に3つでした。生活環境の改善措置、人々にミサを提供する事、そして、柩を作り死者を埋葬

する事。私たちは、そんな説明をリチャード氏から受けて、もう一度、目の前に広がる草原に目をやるよう促され、愕然としました。教会前に広がる一面の草原は、常夏のハワイにふさわしい開放的な広場ではなかったのです。カラウパパ半島で命を落としたハンセン病患者の為にダミアン神父が穴を掘り遺体を埋葬した、数え切れないほどの墓地であったのです。宗教者として赴任しながらも、教会での宗教活動にとどまらない態度は、私たちがもう一度考え直さなければならないものであると感じました。

教会の堂内にも入りました。いわゆる教会式の参列者席に腰掛け、ダミアン神父のミサを想像。特筆すべきは、足許の床に空けられた直径5センチほどの小さな穴です。これは、ダミアン神父の考案した、痰や膿を吐き捨てるために用いた穴です。この小さな穴によって、重度のハンセン病患者がミサなどに参加している最中に、教会外に出なければならぬ不便や、教会に対する敷居の高さが解消され、人々はこぞってダミアン神父のもとを訪ねたとされています。

■ カラウパパ半島の日系人協会

他にも、カラウパパ半島の自然環境・先住民の土地を見学したり、ランチで過ごしたりの後、ツアー客を元の断崖下に送り届け、再びリチャード氏とじっくり話せる時間を得ることができました。

そして、先ほど買い物をしたブックストアは、嘗て日系人のコミュニティと宗教を担っていた「日系人協会」だったという事、現在は鶴見女子中学・高校に祀られているモロカイ観音が、もともと安置されていた建物である事を知り、再びブックストアを訪れ、改めてその建物を見学させてもらいました。ブックストアの正面に2つの石灯籠が置かれている（1つは、4枚目写真右端参照）のも、建物内部の一番奥の部屋の床が一段高くなっているのも、ようやく合点がきました。

最後にリチャード氏の「カラウパパ半島で亡くなった日系人の墓地に行くか？」という提案に、私たちは、二つ返事で乗りました。（以下次号）



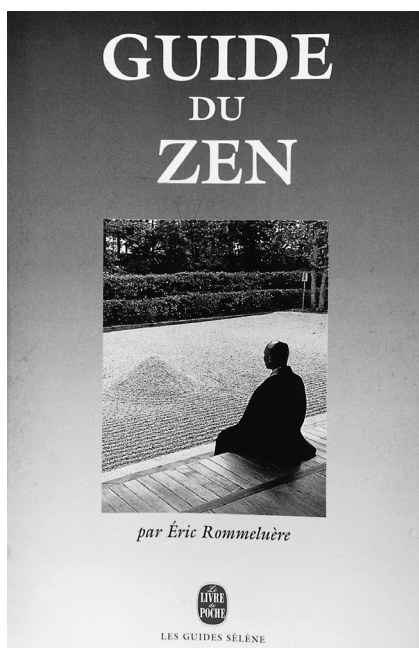
ブックストア（旧 日系人協会）

キリスト教信仰圏と禅 －ヨーロッパ伝道に思う－

山形県鶴岡市 乗慶院住職 五十嵐卓三

《坐る禅》の広がり

弟子丸泰仙師の姿に接するまで、ヨーロッパ人の禅への関心は活字に導かれた知識的な理解にあったともいえる。それが弟子丸師の出現によって《坐る禅》へと展開しはじめた。どのように展開したのだろうか。1997年（平成9年）にフランスで出版された一冊の本、『禅の案内』－（Guide du zen）－を軸にして考えてみたい。



Guide du zen

当然のことながら、この本には大本山永平寺、大本山總持寺をはじめ臨済各宗のご本山、黄檗宗萬福寺、また新居浜の瑞應寺、小浜の発心寺など、日本の代表的な禅寺28ヶ寺が紹介されているが、その多くは欧米に展開する海外の禅協会や禅道場、あるいは禅グループ等々に焦点を当てている。興味深い禅の紹介書で、日本の諸寺院を除いてその数は219ヶ所にわたっている。

先ず、国別に見た《坐る禅》の概要について触れてみる。

《坐る禅》の実践道場一覧表

※参考まで

ヨーロッパ以外の《坐る禅》の国別の道場は次のようである。

- ①カナダ14、②アメリカ53、③中南米4、④韓国6、⑤日本28、⑥オーストラリア8、⑦その他14、計123

ここに示した一覧は、世界に広がりを見せている実践

道場350ヶ所の中から、著者がピックアップしたものであるが、《坐る禅》はいまや《Zazen》として世界の文化的市民権を確立したといってもよいであろう。それでは《坐る禅》の歴史的なポイントに目を向けてみよう。

国名	曹洞宗	三宝教団	臨済宗	エキュメニズム	独立	韓国系	その他	小計
ドイツ	10	6	6	3	3	2	1	31
オーストリア	2		2	2				6
ポーランド	1				1	1	1	4
オランダ	3		1	4	2		2	12
ベルギー	2			2	2		1	7
ノルウェー							1	1
スウェーデン	1	1		1	2			5
フィンランド				1				1
デンマーク		1	2				1	4
スイス	5	3	2				1	10
フランス	10	3	2	3	1	1	2	22
イタリア	5		1	2			1	9
スペイン	4	1	1		1			7
イギリス	4						1	5
アイルランド							1	1
支部	30							30
小計	77	15	14	18	12	4	13	154

《坐る禅》の流れ

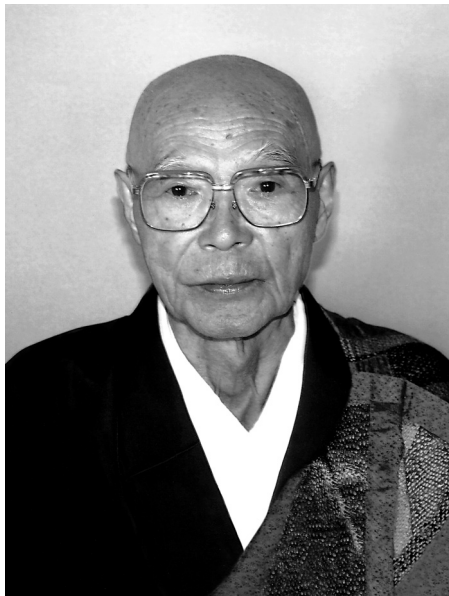
弟子丸師が渡欧したのは昭和43年－つまり、西暦1968年であった。その6年前、1962年－則ち、昭和37年から42年にわたってローマ教皇庁で開かれた【バチカン第二公会議】で、「他宗教との対話を非としない」という歴史的な寛容の態度を決定した。カトリックの神父として、禅に深い関心を寄せられた愛宮真備師（エノミヤマキビ）は、

「私たちは、第二回バチカン公会議が非キリスト的瞑想法をキリスト教の精神指導に統合することについてはっきりと宣伝していることを指摘する」

「－神体験への道としての禅瞑想－」と述べられたように、《坐る禅》はカトリック信仰を中心としているヨーロッパに受け入れられる道が開けたのである。弟子丸師の渡欧はまさに時宜を得たものであつた。

た。しかし、師の急逝は『泰西曹洞第一道場禅堂尼苑』に思わざる混乱を招くことになった。それはヨーロッパ禅伝道の将来のためにと期待された七人の門弟が対立的な状況に陥ったことである。そこには『禅堂尼苑』の主権をめぐる対立があった。と同時に【嗣法】の問題も絡み合ったのである。フランスの国内の門弟と国外の門弟の対立にあった。

フランスの門弟（三人）は、当時大本山永平寺副貫主丹羽廉芳老師の法を受け、国外（イタリア、ドイツ、スペイン）の門弟は、沢木興道老師の法を嗣がれた、秋田県東傳寺住職成田秀雄老師の嗣法を受けたのである。弟子丸師の門下衆は二つの流れに分かれる結果となったのである。フランスは国際禅協会を名乗り、弟子丸師の本流であることを明言した。



元東傳寺住職 成田秀雄師

これに対してイタリア、ドイツそしてスペインの門弟達はそれぞれの禅協会を確立するに至った。ところが、平成14年『禅堂尼苑』で厳修された『道元禅師750回大遠忌』の予修法要は、弟子丸師の薫陶を受けた門下衆が一堂に会する法縁を与えてくれた。弟子丸師滅後二十年目の出来事である。

そして今

すでに明らかなように、いまヨーロッパには曹洞宗の流れを中心とした禅アソシエーション、禅コミュニティを主軸として、臨済宗－妙心寺の流れ－の禅布教、曹洞、臨済、エキュメニズムの三要素を併せ持った三宝教団、キリスト教の【静寂の祈り】に仏教の【静寂な坐り】を加味した坐禅を実践するエキュメニズムの運動、韓国、中国、ヴェトナムの禅瞑想、そしてチベットのタントラ瞑想等々と活発な伝道が展開されている。この中

でエキュメニズムの活動について述べてみたい。

エキュメニズム運動は、1940年にプロテスタントの諸会派の中から起こったといわれるが、やがてカトリックからもそうした動きが生まれるようになった、統一教会運動といわれるもので、キリスト教の新しい動きとして注目されていた。ところが「バチカン第二公会議」以降、

キリスト教以外の宗教との対話が行なわれるようになった。ヨーロッパの信仰とアジアの信仰との交流が目に見えてきたのである。その最も顕著な例が禅者と神父による「東西霊性交渉」の運動であり、また「テゼーへの道」運動である。

テゼーといっても馴染みのない言葉であるが、キリスト教の歴史にその名を残しているクリュニー修道院に近い、フランス中部にある小さな村である。キリスト教の新旧を問わず、全世界から青年男女が何万と集まって来る新しい信仰共同体が活動している地域である。その共同体を訪ねて驚いたことがある。それは「誠」、「真」という一字漢字が若者に大変な人気を呼んでいたことである。そこには如何なる宗教をも区別しないという創始者の精神を生かしているものがある。『テゼーの物語』の中に、

「テゼーは完全なエキュメニカルな共同体としてあるので、われわれは教会のある孤立した、いかなる伝統にも従属することはない」－The story of Taize P45－と述べられているように、新旧キリスト教、東方宗教を問わず、人同士の出会いと沈黙の中に、共同性を体験しあうことをモットーとする信仰的活動である。

こうしていまや、ヨーロッパ人の宗教観は多様な方向へと動きは始めている。そして東洋的な沈黙・瞑想への関心を深めている。その最大の関心が《坐る禅》である。修道院を訪れるとそこに神父さんの《坐る祈り》の姿に接する時代を迎えた今日である。《坐と祈り》の共感的世界の中で、道元禅師－瑩山禅師の打坐の信仰をどのように伝えて行くべきであろうか。新たな課題として受けとめたい。



The story of Taize

愛知万博「世界青年宗教者平和会議」について

S Z I 副会長 浅井 宣 亮

世界青年宗教者平和会議が、7月8日に愛知万博瀬戸会場の市民パビリオン対話劇場で開催され、100人程の来場者を集めました。東海地区を中心に集まった、異なる宗教を信じる国内外の20人の青年がコアメンバーとして「宗教間対話を可能にする条件」を半年以上に渡って、継続的に論じてきました。筆者も曹洞宗僧侶という立場で、この会議に参加しましたので、報告させていただきます。

この会議は、学識経験者や市民活動家、宗教や平和の関連団体などで組織する「地球市民フォーラム」が主催で、その一環として開催されました。開会セレモニーでは緒方貞子氏のビデオメッセージ『平和へのハーモニー』が上映されました。

本会議の目的は、宗教が要因とされている戦争や紛争が世界各地で勃発する現代において、異なった価値観を持つ人々が平和的に対話するためにはどうしたらよいかということ、万博を契機に考えてみよう、というものです。長期にわたり様々な議論がなされたため、ここでは紙面不足で逐一報告することは出来ません。そこで、半年間にわたる議論の総括を総司会古澤礼太氏（キリスト教・名古屋大学大学院博士課程）の言葉、当日の会議のまとめとしてセッション2司会渡辺聖司氏（ワークショップジョイ主宰）の言葉をそれぞれ引用することにしたいと思います。

* これまでの議論の流れ 古澤

宗教間には価値観の違いがあり、対立があり紛争があ



ります。だから宗教間対話は難しい。しかし、私達はこれまでの議論を通し、それぞれの宗教は「人々の平安を目指す」という点で、お互いの目的は共通しているという認識を得ました。どちらの宗教が優れているとか、教義論争さえしなければ、本来宗教間に大きな対立はないのではないのでしょうか？宗教間対立は政治的・経済的対立に宗教が利用された結果ではないのでしょうか。

しかし、人類の歴史において、宗教は一方的に対立に利用されてきた「善意の被害者」と言い切れるのでしょうか？宗教者や団体も、自分達の勢力拡大のため、あるいは教団の生き残りをかけて、様々な対立を利用してきた側面はなかったのでしょうか？

平和を考えるにあたっては、宗教が「人間社会」とどのような関わりをしてきたのか、誰を抑圧し、何を獲得してきたのかということを踏み込んで考える必要もあるのではないのでしょうか。

世界で先住民族のいる国にキリスト教徒が多いのは「宣教」が、大航海時代の西欧列強の拡大政策と共にあった結果です。また、太平洋戦争においても、日本の占領した中国大陆や朝鮮半島で「開教」が行われ、数多くの寺院が建てられたという経緯があります。日本国内においても、北海道の先住民族であるアイヌ民族の和人化政策に、キリスト教や仏教が利用されました。

そしてまさに現在、一部の国々やマスメディアによって、「キリスト教世界とイスラム教世界の対立」という構図があおられており、その共犯者になっている人々が、それぞれの宗教にいることも確かです。

宗教の営みは、教義の中にあるだけではなく、組織を



組み、社会的影響力も持っています。したがって、その存在は良くも悪くも政治的であるともいえます。そのような視点から、お互いの宗教を見つめ直す作業は、これからの私達が、しなくても良い争いに加担しないためにも、大切なのではないのでしょうか？

* 会議のまとめ 渡辺

自然宗教（民族の神話や文化伝統と結び付いて出来上がった宗教であり、その民族の伝統の一部ともいえるもの。通常その民族以外には布教活動を行わない。）と創唱宗教（創って唱え始めた人がいる宗教。ゼロからの出発であるため、対外的に布教活動を行うことにより拡大する。）との間には過去にまた現在でも問題があるようです。対外的な布教を行わない自然宗教は創唱宗教によって改宗させられ、生活文化が壊滅し単に歴史上の文化の一つとして記録される例があります。この危機はローカルな文化を大切にしている地方や国々が抱えている現代の世界的危機に相似していると言えるのではないのでしょうか。

今世界で起こっている紛争の多くは、資源・経済的な誘惑や利害に起因するものが多く、宗教の本来の対象としての魂・霊性・聖なるもの同士の対立ではなく、また、生活を伴う宗教者のありかたがもたらしたもので無かろうと思われます。しかし時に、不適当な布教のありかた、世俗化に対する懸念、マスコミを通じた他の宗教の悪口などにより、糸口を誘発したり政治的な利用によって紛争の端緒を開いていることもあるようです。宗教間の対話の可能性を考えていくとき、それぞれの宗教の教義と歴史的な経緯、教団の利害などに起因した紛争の原因などを良く知る必要があります。

そして宗教人としての対話は、対話の順序や作法を考えることで可能であることが判りました。相手の悪口を言わない、タブーに触れないといったマナーは、宗教者でなくても対話するとき役に立つものと考えられます。宗教は価値観の尺度の上で優劣を比較するようなもので

はありません。この宗教間対話の可能性をさらに社会的な問題解決の糸口にすることができるのではないのでしょうか。

宗教間の対話の枠組みを探る、という壮大な試みでしたが、本日は、対話となったのでしょうか、対立になったのでしょうか。いずれにせよ、宗教者も生身の生活をしながらの信仰であるために現実には、対立を含むいろいろな対話をする必要がある訳です。

ところで、会議前日の7月7日にはロンドン同時爆破テロが発生し、犠牲となった方が多数いらっしゃいました。そこでこの会議の冒頭、参加者と来場者の全員がテロの犠牲者に対して黙祷をささげました。また、会議の主要テーマは「異なる宗教間での対話の必要性」というものでしたが、テロに関する発言も相次ぎました。パネリストの一人であるイスラム教徒のトルコ人、ハシケリム・アリ氏は「コーランには"一人を殺すことは全人類を殺すことでもある"という言葉がある。テロを起こすのは極少数の過激派テロリストであり、イスラム教自体は平和を愛する宗教です。」と主張しました。

最後に、来場者である嶋田義仁氏（名古屋大学宗教人類学教授）の 発言を引用し、本稿を終えたいと思います。

「イラク戦争をキリスト教対イスラム教と捉える人がいるが、ブッシュ大統領がイラクに対して戦争を仕掛けようとした際に、キリスト教のローマ法王は"思いとどまるように"という声明を発表している。また、戦争勃発後も法王は"反対"を表明しています。このことから、この戦争が経済戦争であり、キリスト教とイスラム教の戦争ではないことがわかります。

また、テロ行為は許されざる行為です。しかし、テロは"戦争の敗者側にとっての最終的な抵抗手段"として行われることが一般的です。つまり、戦争がテロを生む原因です。戦争がなくなれば、テロもなくなるといえます。逆に "テロに対する戦争"によってテロを根絶することは不可能だと思います。」



— 国内レポート —

『The mind of the way (道心)』

～ 平成17年度 聖護寺国際安居レポート ～

S Z I 事務局 大谷 有為

熊本県菊池市班蛇口の聖護寺（住職・檜崎通元老師）では、今年ですでに13回目を迎える恒例の国際安居が厳修されました。期間は、2005年5月20日から、7月23日までの約2ヶ月の期間でした。私は、今年度も昨年同様、S Z Iより特別講師（通訳）として、参加させていただきました。

聖護寺は、1338年に大智禅師によって開かれました。熊本県菊池市の北東20キロの山中、標高700メートルの所に位置します。いまだ、電気もガスも通っていない環境の中で、愛媛・瑞応寺からの4名の常駐の修行僧を中心に、厳しい辨道修行が行じられております。

今回、この国際安居に参加した外国人修行僧は、アルゼンチン1名、コロンビア1名、アイルランド1名、そして、アメリカからの短期の参禅者が2名でした。昨年、一昨年と比べると、外国人修行僧・参禅者の数は少なかったのですが、その分、山内の雰囲気は非常に落ち着いていたものとなっていました。

もちろん、毎年の国際安居で問題となる言葉の障害や、文化・慣習の違いは、今年も大きな壁であったし、また僧堂生活に慣れない外国人安居者を指導する苦勞・ストレスも大変なものであったと聞きました。しかし、今回それを乗り越えることができた大きな要因は、一致団結してことに当たった4人の常住の日本人の修行僧たちの力と心に他なりませんでした。

本年度の提唱で使用されたテキストは『知事清規』でした。国際安居最後の期間の7月中旬に、講師として上山された寿松木宏毅老師（秋田県永泉寺副住職）は、法演禅師の逸話から「道心」について、懇々と説かれました。また、『正法眼蔵』の「自証三昧」巻から、「なにとしてもただ仏法祖道を自己の身心にあひちかづけ、あひいとなむを、よろこび、のぞみ、ころろすべし」の

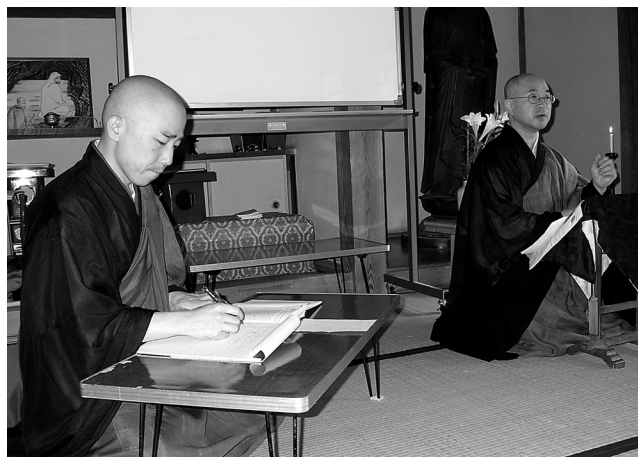
句を引用され、僧堂生活における心構えをわかりやすく説かれました。さらに、「唯識学」にも触れられ、ここ聖護寺で、いかに「理」と「事」を行じ、自分のものにしていくかということをご自身の体験を基に解説されました。

「The mind of the way」は文字通り、「道心」の英訳です。それがいかに困難なものであろうとも、決して辨道の志を忘れてはならないという教えが、修行僧全員の心に確実に浸透していくのが、通訳をしていても実感できました。

また、国際安居解制の前日に、修行僧のひとりから、「聖護寺に修行に来る前は、明日のこと、将来のことばかり考えていました。しかし、ここにきてみたら、目の前のことに集中するようになり、今、ということが如何に大切であるかがよくわかりました。」という感想を聞くことができました。

私も、国際布教師としてハワイに駐在していた時に、実際に足を組んで長い時間坐禅をすることが難しい日系人の檀信徒によく話したのは、この「頭燃を払うがごとく」、つまり、その時、その時を精一杯生きることが一番大切なのである、ということでした。

750年の時をこえて、脈々と生き続ける道元禅師様の教え、禅のところが、ここ聖護寺において、世界各国からの修行僧をも集めながら、着実に受け継がれ実践されているのを、また今年も肌で感じとることができました。下山する日に、やはり、この国際安居は外国人の修行僧がどんなに少なくなろうとも、続けていかねばならないと思いながら、僧堂を見上げていると、アルゼンチンからの修行僧が、私にこういいました。'Even though there is only one seed, the flowers will bloom.'（種はひとつだけでも、いつか必ず花が咲きます。）



S Z I 通 信



元ペルー大統領 アルベルト・フジモリ氏と会見

S Z I 会長 福 島 伸 悦

去る7月15日、東京目黒のWホテルにて元ペルー大統領・アルベルト・フジモリ氏と会見することができた。現在、ペルーの多くの支持者から復権を求める声があり、来年行なわれる大統領選挙に向けて準備中であるとのこと。

フジモリ元ペルー大統領は日系移民の子として生まれ、大統領まで上り詰めた大変稀有の人である。ペルー日系移民については、中央公論新社「大統領への道 アルベルト・フジモリ回想録」のなかで語られている。曹洞宗ペルー百周年記念行事の記事が掲載されたSZI会報28号をお見せし、カニエテの慈恩寺についてお話し申し上げたところ、日系寺院があることをフジモリ氏はご存知であった。

日系移民というとハワイ、ロサンゼルス、ブラジルという都市が知られ、ペルーについてあまり知られていないのが現状のようである。国際布教を語るうえで、日系移民の歴史と精神的支柱となった寺の歴史について私たちは学ばなければならない。宗門では『曹洞宗海外開教伝道史』が差別図書として回収され、現在オフィシャルな国際布教関係の資料がないのは残念なことである。是非とも改訂した『曹洞宗海外開教伝道史』を発刊していただくよう宗務庁当局にお願いしたいものだ。

ところで、9月10日(土)午後2時から、埼玉県行田市・長光寺にて特別講演会「大統領への道」と題して、講演いただくことになった。

動 静 報 告

6月5日	会報28号発送作業	於 貞昌院
6月23日	海外布教支援積立運営準備委員会	於 檀信徒会館
6月27日	大本山永平寺ワークショップ	於 永平寺
6月28日	大本山總持寺ワークショップ	於 總持寺
6月28日	南米総監赴任壮行会・前総監慰労会	於 東京・田町
7月8日	世界青年宗教者平和会議	於 愛知万博会場
7月10～21日	熊本聖護寺国際安居	
7月19・20日	夏期大学講座	於 檀信徒会館
8月2日	会報29号編集会議	於 東京・西新橋

なお、インターネットにて随時役員会を開催しています。

S Z I ホームページ運営中！

S Z I では、活動報告の他、皆様との交流の場を設けています。お陰様で日本も含めて世界各国の方々にご覧頂いており、好評もいただいております。

今後より一層、情報の共有と交流の促進のために、これまでのホームページとBBS(掲示板)に加えて、新しく、S Z I のブログサイトも開設致しました。

<http://www.soto-zen.net/>

<http://www.soto-zen.net/blog/>

ご意見・ご質問等、スタッフ一同お持ち申し上げます。

法具を贈ろう。 仏法を伝える為に出来ること。

使われていない法衣や法具(袈裟、絡子、笏、払子、数珠など)を海外僧侶のためにご寄贈下さい。

「威儀即仏法」を説く曹洞宗の仏法は、正式な法衣・法具と共に師匠から弟子へと伝えられています。また、国際布教師の努力によって、海外の檀信徒・僧侶にも仏法は伝えられています。しかし正式な法衣・法具は、海外で得度する僧侶の増加に伴い、不足が目立ってきました。

曹洞宗の仏法を海外僧侶に正しく伝えるため、各ご寺院で使われていない法衣・法具がありましたら、是非とも、ご寄贈いただきたくお願いいたします。

連絡先：S Z I 事務局 貞昌院(亀野)

〒233-0012 神奈川県横浜市港南区上永谷 5-1-3

TEL 070-5551-8852

寄付者・会費納入者名簿 2005年7月20日まで

◆賛助者(敬称略・順不同)

埼玉県 志木市 大仙寺

◆S Z I 会費納入者

新規会員並びにご継続ありがとうございます。

(敬称略・順不同)

栃木県	矢板市	瑞雲院	
神奈川県	中郡	慶林寺	
東京都	世田谷区		角田泰隆
東京都	八王子市	信松院	西村和裕
京都府	亀岡市	正誓寺	山本現雄
宮城県	栗原郡	通大寺	金田諦典
埼玉県	志木市	大仙寺	
鳥取県	倉吉市	大岳院	中村見自
埼玉県	上尾市	東栄寺	大森篤史
山形県	鶴岡市	田種院	落合道正
埼玉県	鳩ヶ谷市	法性寺	
愛媛県	松山市	法竜寺	仁田喜潤



采川南米総監赴任壮行会、 三好前南米総監慰労会報告

S Z I 事務局長 亀野 哲也

6月28日、東京・田町のワインレストラン「ル・ヴァン・ヴィヴァン」において、本年5月より南アメリカ国際布教総監として赴任された采川道昭老師（S Z I 相談役・元大本山總持寺知客兼國際部次長）の壮行会、ならびに三好晃一前総監の慰労会を開催いたしました。

両大本山ワークショップの開催時期に、采川総監が丁度一時帰国されていたために実現したものです。

当日はワークショップ講師をつとめられた藤田一照先生、森山大行元南米総監、大本山永平寺松永然道副監院老師（S Z I 相談役）、大本山總持寺大山陽堂布教部長老師、また、宗議会中ではありましたが、宗務庁國際課の皆様のご臨席を賜り、30名の参加により盛大に開催されました。

開会の挨拶に続き、松永老師がかつて経験したブラジルでの布教を振り返りつつ、新しく赴任された采川総監にエールを、その後、三好前総監が挨拶に立ち、任期中に夫人が逝去されるなどさまざまな難局を乗り越えてきた思いを胸に、新総監への期待をこめたメッセージを送りました。

大山老師の乾杯により食事・歓談の中、采川総監が「今年はローランジャ仏心寺の開創45周年記念行事（S Z I 会報前号参照）が9月4日に開催され、また、来年はサンパウロの両大本山南米別院仏心寺開創50周年行事（同封の別紙案内参照）が予定され

ています。これら意義ある記念祝典の実現に向け準備中ですので、皆様の力添えをお願いいたします」と挨拶されました。

これを受けて、三好前総監も「記念祝典に合わせて南アメリカを訪れ、大いに見聞してください。南アメリカには坐禅を志す方々がたくさんいらっしゃいますので、優しく、噛んで、含んで、笑顔で話せる、そういう宗侶が今後も赴任することを希望します。どうぞ南米をよろしく」と挨拶されました。

また、森山元総監、小林國際課長も力強い言葉で南米への国際布教に対し激励しました。

南アメリカへの布教の要となる諸老師、関係者が一堂に会し、忌憚のない交流を深めた事は、とても意義深いものであると考えております。

2時間半の時間があっという間に経過し、盛況の中、散会となりました。

参加者（敬称略・順不同）

采川 道昭 南米総監・三好 晃一 前南米総監
森山 大行 元南米総監・藤田 一照 講師
松永 然道・大山 陽堂・小笠原 隆元・山本 健善
月出 俊典・黒柳 博仁・太田 宏人・吉田 ふく子
小林 千秋・加藤 秀典・古溪 理哉・瀬野 美佐
藤川 享胤・細川 正善・福島 伸悦・飯島 尚之
亀野 哲也・大谷 有為・加藤 孝正・田宮 隆児
館盛 寛行・菅原 研洲・太田 賢孝・関水 博道
細川 浩代・杉原 亜実